

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 上原 こそえ 印

学位申請者 黒沢祐人

論文名 魂落としの文学 — 目取真俊の小説におけるケアと環境の修復的想像力

## 【審査結果】

上原こそえを主査とし、主任指導教員の米谷匡史、および副査として真島一郎、久野量一、逆井聡人（東京大学、外部委員）から成る審査委員会は、2024年1月22日に上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行なった。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

## 【論文の概要】

本論文は、目取真俊の小説作品を対象とし、ケアと環境をめぐる修復的想像力の分析を通じて、これまで抵抗の作家として評価されてきた目取真の作品世界を、抵抗と生存の交差する複合的な観点から再評価したものである。目取真文学をめぐる先行研究では、差別や暴力が常態化した社会を舞台とする作品群を、主に権力への抵抗という観点から分析し、作中に描かれる暴力が、本土の視線では不可視化されがちな社会構造の暴力性を鮮烈に露呈させるものとして評価する傾向にあった。

これに対して本論文は、戦後沖縄における生が暴力の被傷体験と不可分であり、目取真作品の主要登場人物も何らかの傷を負うとの観点を先行研究と共有しつつも、傷みの伝達不可能性を慎重に迂回した地平で、傷つけられた他者の身体や記憶を多面的に想像する方が、文学を通じいかに開示されるかという問いを提起した。とりわけ「魂（マブイ）落とし」に内在する沖縄の文化的想像力と、生き延びる視点から人間のトラウマ反応に向きあう臨床的想像力との交差に注目し、語りえぬ記憶を人びとが想起する過程で、断片化した傷としての魂を抱えなおしていく姿を描いた目取真の作品群を「魂落としの文学」とみなし、それがセラピーとポストコロニアルの交差域へと向かう企てであることを明確に提示した。

本論文は序章に始まり、第I部に第1～2章、第II部に第3～5章、最後に終章の全7章（147ページ）で構成された論文である。序章では、差別や暴力の日常化した社会を生きる人々を描く目取真俊の作品を、権力への〈抵抗〉の観点から論じる先行研究の問題点を指摘している。先行論は、目取真作品で描出される身体が、暴力と非暴力とを横断しながら〈生存〉する過程を論じることを困難にしていることが問題であった。黒沢氏は、目取真の小説に描出された身体の多面的な側面をとらえるための視座としてケアと環境に着

目することの必要性をここで提示している。

第I部「生存——生きのびるための魂落とし」では、権力への抵抗に焦点化するこれまでの〈抵抗〉論を再検討することを通じて、暴力と傷を横断するケアと環境の想像力についての議論が展開され、魂落としにより生きのびる身体という目取真文学のモチーフが明らかにされる。第1章「食い破られた「日常」を生きる沖縄の少年——「魚群記」における〈生存〉としての抵抗」では、1983年の小説「魚群記」が扱われ、施政権返還直前の沖縄本島北部の農村で暮らす少年が、暴力の常態化する日常を生きることを可能にする方法として、暴力的な情動から距離を置くための環境的な想像力と魂落としにより「日常」を生きる解離的身体を描いていることが明らかにされる。

第2章「テロ、あるいはケアとしての糞便——「平和通りと名付けられた街を歩いて」における依存する身体とケア」では、1986年の小説「平和通りと名付けられた街を歩いて」が扱われる。沖縄戦を生きのびた老婆による皇族車両への人糞のなすりつけ行為を描く本作は、マブイを落として生きる老婆のトラウマ身体が、救えなかった息子を救いなおそうとするケア行動を反復しており、その意味で、本作には「ケア」の主題が通底していることが指摘される。

次に、第II部「現場と修復——ひとつびとつ傷（マブイ）と協働するために」では、個々の記憶の「語りえなさ」に着目し戦争記憶の継承について論じてきたこれまでの読解からの転換を試み、ケアと環境に依存する身体が生きる関係性の広がりに着目した目取真作品の読解を展開している。第3章「依存とケアの水——「水滴」における関係としての可傷性のネットワーク」では、1997年の小説「水滴」が、「魂落とし」という「病」を抱えた戦争体験者の〈生存〉のプロセスを描くことを通じて、弱さを受け止めて生きるための関係としての可傷性のネットワークを描出していることについて検討される。具体的には、主人公の戦争記憶が、戦場で失敗したケアのやり直しであることに着目し、その記憶を想起するプロセスを、戦場および戦後を生きるなかで断片化した情動、すなわち、かつて落としたマブイを抱えなおす〈生存〉のあり方として読みなおしている。さらに、この章では、主人公が自身の傷を抱えなおす過程そのものが、主人公の身体をケアする周囲の人々との関係に依存していることに注目しており、関係としての可傷性のネットワークを描出していることも明らかにされる。

第4章「マブイを落とせる浜辺で——「魂込め」における戦争記憶とケアの〈現場〉」では、2000年の小説「魂込め」を扱っている。本作では、戦争体験者の老婆が、マブイを落とした男性のために、村の浜辺でマブイグミと呼ばれる伝統儀礼を行うなかで自身の戦争記憶を想起する。目取真作品では、戦争記憶の想起という行為が、人間だけでなく、土地や動植物、人間以外の「環境的なもの」に依存して成立していることを可視化するために〈現場〉という枠組みが提示される。

第5章「マブイの群れとして生きるゴゼイ——「群蝶の木」における〈群生〉する記憶と修復的想像力」では、2001年の小説「群蝶の木」が扱われ、前章で提示された〈現場〉が、身体の内面に及ぶものとしてあることが検討される。具体的には、性暴力の被害者として位置付けられてきた元「慰安婦」である沖縄女性の語りが、記憶の欠片を群れのように想起して自己を修復する〈群生〉の語りとして表現されていることが明らかにされる。

最後に、終章では、2004～2007年連載の長編小説『眼の奥の森』を中心に、その他の目取真作品にも触れながら本研究が提示した読みの方法である、受傷者の〈生存〉の枠組みについて検討する。具体的には、『眼の奥の森』における性暴力被害者の小夜子の〈生存〉と、その小夜子とのあいだで依存とケアの関係を生きる妹のタミコに注目し、「戦後」沖縄で生きる様子が多声的な語りによって表現されていることを、暴力的な情動を抱えながら今ここを生きるための受傷者の〈生存〉の語りとして理解することが提起される。

#### 【審査の概要及び評価】

試験席上では、冒頭で学位申請者によって本論文の概要が説明された。続いて、各審査委員より本論文を評価できる点として、次の点が挙げられた。

本論文は、目取真俊の作品読解にあたって、ケアと環境をめぐる人間の修復的想像力に着眼しながら、既往の目取真研究を斬新な視座から説得的に深めようとした労作である。とりわけ、抵抗の概念をめぐるポストコロニアル批評の定型的な当為の議論を周到に回避する試みを通じて、暴力の被害者が外部から過剰な倫理的負荷を負わされることなく、自らの力で傷を修復して生き延びていくための柔軟な想像力の可能性を、作品読解から説得的に剔出しえた点はきわめて高く評価される。

新たな読解の手法を明晰に開示するために、本論文は目取真の主要作品を丹念な筆致で章ごとに分析し、登場人物の身体表現や人間と動植物との存在論的な連関をきめ細かく省察した。主張が先乗りする危うさはそうした論述に見いだされず、もっぱらテキストの内部にとどまって省察する姿勢が論文全体を一貫している点も、文学研究の着実な成果として評価に値する。

質疑応答では次の点が質問として提起され、黒沢氏からの回答があった。

1) 個別の作品を扱う章ごとの論述に、読み手への説得力としていまだ幾分の濃淡が窺えるのではないかという指摘に対しては、本論文の主題でもあるケアと環境についてはそのこと自体をわかりやすく議論できる作品としての「水滴」や「魂込め」についての作品論が確かに理解しやすいであろうとしながら、しかし、他の作品論を通じて、戦争記憶をいかに継承するかという具体的論点をつなぎ合わせながらケアと環境をめぐるより複雑なプロセスを探ろうとしたとの説明があった。

2) 著者が独自に呈示する概念の規定にやや曖昧さが生じているのではないかという指摘に対しては、例えば本論文で提示される「沖縄的なもの」との表現が意味するものを明示的に議論するために、作家目取真俊が作家として活動を始めた1980年代の社会を含め、沖縄近現代史に関する議論を今後の研究に活かしたいとの回答があった。

3) 主体の同一性をひとたび判断停止する立論では、現実の沖縄現代史との関わりからみた圧倒的な「加害者」の責任が後退しかねないのではないかという指摘に対しては、責任の問題を構想しかねてきたことを認めつつ、傷つけた者もまた傷ついた者である、という視点を重視しながら、責任の問題を今後より具体的な視点として考えていきたいとの返答があった。

4) 人間精神の「統合」性をめぐって臨床的想像力と文学的想像力のあいだには究極的に懸隔が生じかねないのではないかという指摘に対しては、あくまで統合することは不可能でありながら、断片化した身体の苦しみをいかにして生き延びることができるのかという問題への答えとして、統合するのでも断片化するのでもなく群れとして自己が存在しうる分有・群生の想像力が目取真作品で提示されている、との返答があった。

5) 暴力の主題下でケアと環境に着目する場合、目取真文学は世界文学のなかでいかなる位置づけを帯びうるかという問いに対しては、目取真自身がラテンアメリカ文学から着想を得た作品も多いと言及していることに触れつつ、暴力が日常化した社会を前提としながらその中でどういう物語を描いていくかを議論できるような世界文学へも視点を広げて議論を展開していきたいとの返答があった。

6) 例外状態に置かれた人間の危機に迫るうえで文学、フィクションに固有の力をいかに考えるべきか、なぜフィクションでなければならないのか、という問いに対しては、作家目取真自身が沖縄戦の「非体験者」であり自分自身の経験として語れないという条件がありながらも、同時に、沖縄戦体験者とともに生きてきたという経験を持ち、目取真作品を読むことでしか感じ取れない戦後の人間の身体性があったと説明しつつ、なぜ目取真がこうした表現を使うのかを近現代史に触れずに提示してしまったことが問題だったと言及した。

7) 文学研究といえども、目取真自身が生きる現実の沖縄社会または沖縄現代史の研究成果をさらに摂取していく余地はないかという問いについては、具体的な歴史の言説を今後、文学を読む中でいかに導入していけるかが課題であるとの返答があった。

審査員からの質問に対する黒沢氏の応答は逐一明確であり、また、今後の課題として残された点を精確に認識していることを確認できた。審査委員の示した上記の若干の問題点は、黒沢氏が提出した博士論文の卓越性に即した水準での懸念であり、本論文の学術的価値それ自体をいささかも損ねるものではない。

以上の博士論文の評価および最終試験での質疑応答の内容から、審査委員は全員一致で、学位申請者が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。